



大海小学校学校だより

おおみ 第4号

実話から環境の大切さを学ぶ

校長 油井 宏樹

先日、テレビでオオカミについての番組をしていました。幼い頃、父からオオカミに育てられた人間がいるという話をふと思い出しました。

調べてみると、今から100年ほど前にインドで起こったことでした。インドの山奥であった出来事です。オオカミの群れの中に人間のような動物がいるという目撃者が何人もいました。その話を聞いたシングという牧師さんがその話が本当なのか、調査しました。シングさんは、危険を恐れずオオカミが住んでいるところに入りました。そして、オオカミの巣穴から人間に似た動物が出てくるのを発見しました。オオカミを巣穴から追い出し、人間らしい二人を捕まえました。間違いなく人間の子供です。しかし、捕まえた大きい子は凶暴で歯をむき出し、うなりながらシングさんを威嚇してきました。小さい子は、何が起きているのかわからないほどの年齢だったようです。

シングさんは夫婦で、二人を育てることにしました。二人の名前をカマラ（大きい子）とアマラ（小さい子）としました。オオカミの群れの中で育った二人が、普通の人間らしい生活をすることは、容易なことではなかったようです。

二人の生活記録が残っています。人間が与えたものは警戒して食べないので、どんどん弱っていきます。そのうち、牛乳と生の肉を食べることが分かりました。立って歩くことはできません。四つ足で歩くのですが、人が追いつけないほど速く走ります。昼はじっとしています。夜になると目を見開いて、部屋の中をうろうろと四つ足で歩き回ります。話すことは全くできません。暗闇の中、犬のように遠吠えをします。遠く離れたところの鳥の死骸をかぎ分けて見つけ食べようとするこもあったようです。

残念ながら10ヶ月後、アマラが病死してしまいます。アマラがいなくなった後、カマラはアマラがいた場所の臭いをかいで恋しがります。アマラがいなくなったことは、カマラにとってとても悲しいことは理解できたようです。悲しいけれど、カマラは声を上げて泣くということができませんでした。アマラがいなくなってしまった後、シング夫妻によって、カマラが人間として生きるための訓練が始まります。約2年かけて、二本足で立てるようになりました。さらに、衣服を着るまでに4年かかりました。トイレにいけるようになるまで、5年かかりました。しかし、残念なことに、約9年後、カマラは病気で亡くなってしまいます。

カマラとアマラは人間の子供として生まれました。しかし、オオカミによって育てられ、生きていくためにオオカミになるように生きてきました。いったんオオカミになる学習をした二人にとって、人間になることは非常に難しいことでした。このカマラとアマラは、私たちに大切なことを教えてくれました。

人間は生まれながらに人間に育つことはないということ。私たちは、成長する過程で立って歩きます。悲しいときは泣きます。その何気なくしていることが、実は生まれながらにできたことではなく、家族や周りの人がいて、その環境で育ったからできるようになったのだということ、人間は人間の中で育って初めて人間らしくなれるということです。

もう一つは、環境によっては、人間はオオカミのようにも変わるということ。言い換えれば、さまざまな可能性を秘めて生まれてきているということです。悪くなるような学習をすれば、悪い人間になります。良くなるような学習をすれば、良い人間になります。

そして、私たちは、どうして学習しなければならないのか？ 今よりもっと人間らしくなるためだと、オオカミに育てられた二人が教えてくれた気がします。